

非核奈良

森本孝順(唐招提寺長老)筆

2011年
2月15日
第94号

発行 非核の政府を求めめる奈良の会

〒630-8213 奈良市登大路町3-6 大和ビル4F

奈良合同法律事務所 気付

電話0742-26-2457 FAX26-3010 郵便振替01020-1-56459

私たちは非核の五項目を
実行する政府を求めます

- ① 全人類共通の緊急課題として核戦争防止、核兵器廃絶の実現を求める
- ② 国是とされる非核三原則を厳守する
- ③ 日本の核戦場化へのすべての措置を阻止する
- ④ 国家補償による被爆者援護法を制定する
- ⑤ 原水爆禁止世界大会のこれまでの合意にもとづいて国際連帯を強化する

文化財の危機と平和

奈良大学文学部教授(保存科学専攻)

西山 要一

- ① 彫刻や工芸、建築など文化財の高い評価は、作者の優れたデザインや技術に拠るところが大きいのですが、その背景には文化と歴史が色濃く反映されています。文化財は歴史・文化の所産であるといわれる所以です。文化財の材質・技法や科学的保存処理・修復を研究していると、文化財を作った人の生き様とその時代の社会・文化を直接体感することができます。それは華やかな文化・歴史の象徴としての“表の顔”と、人間の残酷性や過酷な社会の“裏の顔”を体感させるものです。文化財から学ぶことが如何に大きいことか。
- ② 1978年、私は埼玉県の稲荷山古墳から出土した獲加多支爾大王(雄略天皇)の名など115文字を金象嵌で記した鉄剣と遭遇し保存処理を担当しました。日本の古代の銘文鉄剣は、工人の優れた技術を示すとともに、銘文に“災いから免れ日々無事に過ごせますように、幸福になれますように”との、現在の私たちと同じ願いが込められほほえましく感じます。人間としての願いをかなえるために技術

を駆使し、素晴らしい作品が作られたのです。“歴史は戦争によって作られる、科学や文化は戦争によって進化する。”といわれることがあります。この歴史観、進化論はまったくの誤りであることが分かります。

- ③ このように歴史・文化の所産である文化財を、公然と掠め取り、破壊するのが植民地支配や戦争です。大英博物館がギリシャ・パルテノン神殿の彫刻を、ルーブル美術館がギリシャのミロのビーナスを、ロシア・エルミタージュ美術館が中国の敦煌文書を、ドイツ・ベルガモン博物館がイラクのイシュタル門を、東京国立博物館が中央アジアの壁画や朝鮮半島の仏像を誇らしげに展示しています。他国の窮状にまぎれて財力によって文化財や芸術作品を我が物としていたのです。また、ベルギー・ルーバン図書館が二度の世界大戦で灰燼に帰してヨーロッパ至宝の図書を失い、ドイツ・ドレスデンの中世の町並みが空襲によって壊滅され、日本の名古屋城や長崎の浦上天主堂や沖縄の首里城が、原爆投

下や砲撃で壊滅に帰すなど、文化の抹殺が公然と行われています。植民地支配や戦争による文化財の搾取には人類の遺産を守るため、文化財の抹殺には世界平和のためなどに、その都度正当化しますが、言い訳にしか過ぎません。

- ④ 奈良大学保存科学チームは、2002年からレバノン共和国南部のティール市(スール市)郊外のローマ時代1、2世紀の壁画地下墓2基の保存修復を行っています。中東のパリといわれた首都ベイルートが1975年から15年間の内戦で廃墟と化し、ティールなどレバノン南部は2000年までイスラエルの占領が続きました。その内戦中にレバノン文科省はティールやビブロスなどの遺跡を戦争の惨禍・略奪から守るために世界遺産登録を実現しました。戦争だから、文化財の破壊はやむを得ないとする考え方、言い訳を打ち破るものです。

文化財を守ることは、文化を守ること、歴史を正しく学び伝えること、他民族や他国を理解することにつながり、平和を築く強い力になるものと思います。

(編集部注)

西山先生は発掘現場の保存のために世界中を飛び回っておられます。

今年1月の拡大常任世話人会で、同じテーマで講演いただきました。

非核平和への着実なあゆみも

（恒例）県内自治体への「非核平和行政」

アンケートから

全自治体で非核平和宣言

本会では、2・3年おきに県内すべての自治体を対象に「非核平和行政」アンケートを行っています。2010年に行ったアンケートの結果について報告します。

奈良県を含む40自治体のうち、29自治体から回答がありました（回答率72.5%）。

合併後の葛城市が2008年に「非核平和都市宣言に関する決議」を行ったことで、再び県内の全自治体で非核平和宣言がなされたことになりました。

例年通り尋ねた非核平和行政の位置づけ、具体的施策や活動、非核平和行政予算については、予算面で、自治体財政の逼迫を受けて引き続き厳しい状況にあることが分かりました。戦争体験の語り部など、住民の協力によって財政負担を抑制しながら、いま求められる非核平和行政を推進するための知恵を集めることが必要です。

広島市の国民保護計画

今回の新たな項目は、各自治体が制定している国民保護法に基づく国民保護計画の内容、とくに、核兵器

による攻撃への対処についてです。総務省の原案では、「風下を避け、手袋、帽子、雨ガッパによって放射性降下物による外部被曝を抑制」するなどとされています。これに対して広島市では、「核兵器攻撃もたらす具体的な被害想定やこれに基づく対応策は示されていない。このままでは、核兵器のもたらす惨害について大きな誤解を定着させてしまうおそれがあると考え、核攻撃による被害想定、被害発生メカニズム、核攻撃への対処について独自に検討しました。その結果、「核兵器攻撃によってもたらされる被害を回避することは不可能であり、また、核兵器のもたらす被害は筆舌に尽くしがたいほど大きく多様であるため、行政が最善の対処措置を講じることができたとしても、被害をわずかに軽減する程度の効果しか発揮し得ない。さらに、重大な困難を最後にもう一点付け加えれば、どれほど長い期間と巨額の資金を注いだとしても、被災者の傷が完全に癒えることは、精神的にも肉体的にもあり得ない」、「果たして我が国は核兵器攻撃に対処し得るのか、し得るとすればどの

ような方策をとるべきなのか」という疑問に対し、核兵器攻撃から市民を守ることはできず、市民を守るには、意図的であるか偶発的であるかを問わず、核兵器攻撃の発生を防止する他に方策はなく、そのためは唯一、核兵器の廃絶しかないと答えるを得ない」との結論に達しています。

アンケートでは、この広島市の見解を提示し、核攻撃対処条項について尋ねましたが、独自の検討を行ったという回答は残念ながらありませんでした。

非核三原則の法制化

これについては、国レベルの問題であることなどを理由に「どちらともいえない」との回答が14である一方、「必要」との回答も12あり、その理由として、「核兵器が抑止力になっているというが、人類を破滅させる恐れのある核兵器が地球上からなくなる限り、不安から逃れられず、平和を享受できない」（川上村）として核抑止論に疑問を投げかける回答や、「核廃絶を訴えるためには、まず自国内の法制化が必要」（斑鳩町）などの回答があったことは注目されます。また、「不要」、「どちらともいえない」と回答した自治体においても、「非核三原則を厳格に守り、非核・平和日本宣言を行うことを求める意見書」（大和高田市・川西町）、「非核三原則の法制化を求める意見書」（大和郡山市）、「核兵器廃絶の国際条約締結へ、政府の具体的な努力を求める意見書」

（橿原市）、「ヒロシマ・ナガサキ議定書のNPT再検討会議での採択に向けた取組を求める意見書」（大和郡山市・曽爾村・広陵町・天川村）などが採択されています。

平和市長会議

一方、前回アンケートから大きく前進したのは、平和市長会議への参加です。平和市長会議は、1982年に当時の広島市長が世界の都市が国境を超えて連帯し、ともに核兵器廃絶への道を切り開こうと提唱し、広島・長崎両市長から世界各国の市長宛てにこの計画への賛同を求めたものですが、2009年までに奈良県内では6市町の参加だったものが、10年には17市町に増えており、さらに6市町村が参加を検討したいと回答しました。こうしたこと背景に、昨年5月に開催されたNPT再検討会議に向けた国際署名が取り組まれたこと、とくに奈良県では全自治体首長に署名への賛同をはたらきかけ、実現したことに見られる地域住民の草根の活動があったことをあげることができます。

わたしたちの暮らしと安全をもっとも身近なところで守るべき自治体に対し、わたしたちは主権者として、よりよい非核平和行政の実現を働きかけていきましょう。

なお、詳しいアンケート結果は、本会ホームページでご覧いただけます。

（事務局長 今 正秀）

感想 安川講演

丸山と司馬の「歴史の偽造」を解明 本当に目からウロコ

安川寿之輔さんは、「私の話を聞いて『目からウロコ』という人が多い」と話し始めましたが、本当に私もそうでした。

「目からウロコ」の一つ目は、「『明るい明治』対『暗い昭和』」という司馬遼太郎の歴史観は、丸山眞男（註）の「明治前期の『健全なナショナリズム』対昭和前期の『超国家主義』」という二項対立史観を踏襲したものだったということです。

「明るい明治」は、日本が武士道の精神に基づき、国際法を遵守し、日清・日露戦争に勝って国際的地位を高めたなど、「明治はよかった、大好き」という考えです。

これに対して昭和前期は、一部軍部のせいで侵略戦争を起こし、日本を破たんへ導いたとして「暗い昭和」と言います。そして、「明るい明治」とは連続せず、「異胎（いたい）の時代」だったとして、明治以来のアジア侵略、植民地支配の国家責任を免罪しようとしています。

司馬の『坂の上の雲』は、日清・

日露戦争を通して日本の勃興期を描きました。まさに「明るい明治」です。だから、日本が朝鮮で何をしたか、それに対する朝鮮の人々の抵抗など、「明るくない明治」は書くわけにいきません。

二つ目は、丸山眞男が「明治前期の『健全なナショナリズム』」を代表する思想家として紹介した福沢諭吉像は、全くの虚像だったということです。

福沢は「天は人の上に人を…」という人間平等論などを主張した明治の先覚者、というのが日本人の常識です。しかし、これは「アメリカ独立宣言」の一部を借りたもので、福沢自身の思想ではありません。それを戦後、高名な学者である丸山が福沢自身の思想であるかのように誤った紹介をしたため、日本人の常識になってしまいました。これこそが「丸山論巨」神話だ、と安川さんは強調します。

私は、『脱亜論』で福沢のアジアに対する蔑視、偏見、侵略を正当化



2010・12・3 非核平和のつどい
安川寿之輔先生の講演風景
於 奈良県教育会館

する文章にふれ、ビックリしたことがあります。しかし、それは後半生のことだと思っていました。

しかし、福沢は初期から徹底した保守主義者であり、「暗い昭和」の思想的先駆者であることを、安川さんは多くの資料を提示して明らかにしてくれました。

NHKドラマ「坂の上の雲」で秋山好古が語る「一身独立して一国独立す」も、丸山は高く評価しています。しかし、福沢自身が「自国独立」最優先で国のためには財産も生命も惜しむな、と言っているのです。つまり、「暗い昭和」のスローガンである

「滅私奉公」「一億玉砕」論の先駆者だったのです。

安川さんのお話は、福沢論を追究しながら、丸山眞男と司馬遼太郎による「歴史の偽造」を糾明し、日本近現代史をどう見るか？に迫るもので、とても勉強になりました。（会員 樽井幸一郎・子どもと教科書奈良ネット21・元教師）

註 丸山眞男：1914～96。

昭和・平成期の政治学・政治思想史学者。大阪市出身。東大卒。1950～71東大教授。荻生徂徠・福沢諭吉の学問と思想を中心に日本政治思想史研究に業績をあげた。戦後、日本軍国主義者・超国家主義者の思想と行動の解明などの評論を発表。自由主義・民主主義派の知識人として1950～60年代の論壇に大きな影響を及ぼした。著書「日本政治思想史研究」「現代政治の思想と行動」「日本の思想」など。

【「日本史広辞典」

（山川出版社）を要約】



近畿ブロック

産業としての核兵器を認めない(リーパーさん)

充実した講演と交流

◆来年は和歌山で

今年も非核の政府を求める会近畿ブロック交流会が、11月20日滋賀県近江八幡市で開催された。

第一部の講演会。会場に入ってみてびっくり、空席はそれなりにあるが明るく若い集団が一角を占めている。えー!?! 素晴らしい! 講演会は非核の政府を求める会の会と反核医師の会との共催で、若い人たちは医療研修生なのだ。

講演は、広島平和文化センター理事長のステイヴン・リーパー氏と熊本の被爆者中山高光氏。お二人とも非常に熱く核兵器廃絶への道筋を話された。特に若い参加者には大変刺激的な経験だった様子。リーパーさんの話は、アメリカ人らしく実際のダイナミックで、しかも遠慮のない状況分析と提言が大変魅力的で引きつけられるものだった。

リーパーさんは主張する。「核兵器が何故禁止されないのか、それは作られる前から「産業」だから。今までの人間共存の伝統的な方法は戦争だった。今も地球規模で見ると、殆どのお金は武器を買うために使われており、これで物事を解決しようとするれば人間は滅びる以外にない。その手段は、多分核兵器だろう。これをコントロールするのは、その意思がどれだけ真剣にかかっている」。また「日本には可能性がある。それは、日本人の殆どが核

兵器はダメだと思っていること。日本の核産業はアメリカの核産業を捨てることは出来るだろう(原発にシフト)こと。そして草の根(票)が動くこと。政府は動かざるを得なくなる。でも、今政府は動く意志がない、それは草の根が眠っているからだ。そして「今が平和を選ぶチャンス。平和のために戦わねばならない。いろいろな点で対立があってもその解決方法が下手ではない。愛の上にくそ協力が出来る。愛の上に築かれたパートナーとなることが大切で、支配される者のパラダイムから協力へのパラダイムにシフトせねば地球は滅びる」。その方法は「メディアは戦争を応援する。そのメディアを使うには、無視できないほどのアイディア一杯の大規模なイベントを計画する以外にない」と。

一方、中山高光さんは長崎で爆撃した81才の方。5月のNPT再検討会議ではニューヨークに行き、皆さんとアピール行動をする一方各地で開いた講演の報告であった。

アメリカでは被爆者の講演となるとやはり硬い表情、反感の表情に包まれることが多いが、中山さんは先ず「真珠湾攻撃は本当に申し訳なかった」ということから話し始める。そして、「だがしかし、広島長崎の原爆は間違っている。原子爆弾は人類を破滅させる兵器だ。絶対になくさなければならぬ兵器だ」と訴える。すると必ず聞いてもらえるし賛同する人も出てくる。それは韓国中国でも東南アジアの国々でも同じ。先ず日本人として日本の加害を心から謝罪することが大切、と話

された。非常に大切な、忘れてはならない姿勢の指摘だと思う。ともすると被爆者のお話は、重すぎてつらすぎて思わず逃げ出したくなることもあるが、中山さんのお話は聞かざるを得なくさせるものだった。

第一部の講演会のあとは交流会。近畿6県の非核の会から数人ずつ全部で80人ほどの出席だったが「ちょっと残念ね」の感有り。これは非核の会の会員であれば誰でも参加できる会だが、常連(?)の世話人が殆どで会員の参加が大変少なかったからだ。

交流会では各県の非核の会が1年間の取り組みを報告するのだが、六会六色でとても面白い。何れもそれまでの流れの中で進めているのだが、その成果やつまづき等が見え参考になり、新しい視点も開けお互いに力づけられる。そして大いに食べて他の会の方としゃべって、来年の会の担当を決めて終わる。

奈良の会の皆さん、来年は和歌山の非核の会が担当。和歌山は今会員数が減って苦戦しています。是非みんなでも参加して賑わそうではありませんか。なんと言っても、平和か人類の絶滅かを選ぶ時、みんなが力を出さねばならないのだから。

木村有子(常任世話人)

◆私のひとり言川柳

よし子

ブクブクが欲しい官邸の金魚たち

どさくさに三原則がかけられる

その角を曲れば亡母の風に遇り

(常任世話人)

☆活動日誌(2010年)

- 10月29日 事務局会議
- 11月20日 近畿ブロック交流会(滋賀)
- 11月22日 第139回常任世話人会
- 12月3日 非核平和の集い(教育会館)
- 12月17日 事務局会議

(2011年)

- 1月19日 第140回常任世話人会(拡大)

☆今後の予定

- 2月22日 事務局会議
- 3月15日 第141回常任世話人会
- 6月 定期総会・非核平和の集い
- 7月

☆編集後記

昨年末に96歳の父親が体が動かなくなって、以後妻、妹夫婦、息子夫婦と共に老々介護の状態にあります。入院中はともかく自宅での介護は大変です。訪問介護の方々の献身的なお世話と家政婦さんへの無理な注文も、受けて下さるので有り難いです。それでも身内の心労と身労は重いです。病院に毎日誰かが面会に行くことなどは大した苦勞ではないと感じます。その上、元気だった妻の母親が90歳で突然亡くなるということが重なって、編集が遅れましたことをお詫び申し上げます。

この3ヶ月間は、近畿ブロック、非核平和の集い、西山先生を招いての拡大常任世話人会と大きな行事が3つもありました。川柳の岡谷よし子さんは昨年暮にお母さんを亡くされた想いを詠まれました。

吉田恒俊(常任世話人)